

校訓

明 信 覇  
朗 念 氣



第11号

発行 県立富士宮北高等学校同窓会  
北嶺会  
静岡県富士宮市大宮 2300 (北高内)  
電話 (0544) 27-2533 (代)  
編集 北嶺会広報部  
部長 井出元一



新しいまちづくりを

富士宮市長 吉田 廉



はじめ、実業家、教育者等々、数えきれない方々と人としてのふれあいを経験し、これが私の将来への一つの示唆となった。

私はこの四月、富士宮市民によって第十三代市長に選ばれた。厳肅に、市民の負託を受け止めている。

私のなすべきことは、望月軍四郎先生の理念を、わが郷土に具現させることにあると肝に銘じている。

思えば、はじめて実高(北高の前身)に奉職し、一介の青年教師の身で、文部大臣であられた高瀬荘太郎先生(母校創設時代は、しばしば北高にいられた)を、

桜梅桃李

静岡県議会議員

稲田 圭 佑

(昭和三十一年度卒)



夕陽を浴びながら、迷った。この始めは、六月初旬のある日、大先輩の某氏が、突然訪れて、一筆と云うことである。私如きもの、さと思ひめぐらした

北辰館(武道場)

が、此度の統一地方選挙における県議会選挙で私が幸いにも勝利の栄冠を得たこととが起因と考へ、北高同窓の一人として、母校に同窓の皆さんに感謝の気持ちをこめて一筆思うがままにし

たためさせて頂きました。創立者、望月軍四郎先生の御遺訓を、社会生活の上にとだけ、具現なし得るか。それは、そこに学び、果立った我々にとつての最大の命題であります。

創業者、望月軍四郎先生の御遺訓を、社会生活の上にとだけ、具現なし得るか。それは、そこに学び、果立った我々にとつての最大の命題であります。

創業者、望月軍四郎先生の御遺訓を、社会生活の上にとだけ、具現なし得るか。それは、そこに学び、果立った我々にとつての最大の命題であります。

創業者、望月軍四郎先生の御遺訓を、社会生活の上にとだけ、具現なし得るか。それは、そこに学び、果立った我々にとつての最大の命題であります。

思い出深い旧校舎もすでになく、整然とした環境の中でこの二つは、北高の象徴のような気がしたからだ。わずか一年で、県の課長として転勤したときは、惜別の念をび得ないものがあつた。

昭和五十五年八月、三たび、わが富士宮市に助役として就任し、行政を担当することになったときは、人為とはいへ、運命の不思議さに驚いた。

吉田氏は大正十五年八月二十日生、五十七才の内大宮二六四三の二在住。昭和二十六年三月法政大法学部卒。富士宮実業高校(現北高)、富士宮北高、富士宮農高教諭を経て、県教委社会教育課指導主事、同課家庭教育係長。四十八年四月県立朝霧野外活動センター所長、五十一年四月県立大仁高校長、五十四年四月県教委社会教育課長。五十五年八月富士宮市助役に就任している。

昭和五十二年、再び校長として赴任したときの感激は忘れられない。毎朝、望月軍四郎先生の像に礼をし校長室に入った。又、十二月三十一日には校庭北端の稲荷さんにもお参りした。

吉田廉氏は去る四月二十四日、市長選で見事当選を果たした。自民推せん、民社支持を得て、植松義忠

の一人であります。振り返れば、北高のあゆみも多くの変遷を経ているが、我々の時代も大きな変革をよぎなくされた時代でもあつた。

思い出多き、中学・高校時代、伸びくと、やりた

なものである。昨今中学生の非行化現象が、頭著となつて、誌上にも、考えも及ばない事件が生々しく、その実態を報道しているが、全く悲しむべき現状です。我々の中学時代、学校の敷地内が、地域であり、家庭でもあり、先輩・後輩のきずなの中で、情味を醸し出すなかで、全てをさらけ出して、お互いが接し得る事が出来たことは生涯にとつて、幸せであつたと思つています。個々の性格も全く違うなかで、忘れ得ぬ出会いの人も数多くありました。

私は「桜梅桃李」という言葉が好きです。桜は、梅は、桃は、李は、それぞれにかけがえのない特性、個性をもつています。桜は、梅は、桃は、李は、それぞれにかけがえのない特性、個性をもつています。桜は、梅は、桃は、李は、それぞれにかけがえのない特性、個性をもつています。

# 昭和五十七年度 北嶺会の動き

57年 藤教頭(新任)を迎え、  
5・27 又特別ゲストとして元北  
役員会 57年度総会日時  
高校長吉田麻先生の講演  
等の決定及び北嶺会だ  
り第9号発刊の準備

6・25 北嶺会だより第10号編集  
役員会 57年度総会最終  
打ち合わせ他

6・26 母校北嶺祭に今村・井出  
正副会長出席

7・4 57年度総会、サンパレス  
にて開催。来賓に宇佐美  
校長(新任) 柏瀬及び伊

# 各部の紹介

(文化部系抜粋)

### 北高

役員数は少ないが、その活動は、毎日の積み重ねが大切な活動である。日頃は各自が自由に油絵・水彩画等の作品に取り組んでおり、その成果を市内画廊で実施する「北美展」において、みなさんに見てもらっている。また校内においても、文化祭その他の機会を通して、地道な活動を続けています。

## 美術部(八名)

北嶺会だより一節活動の近況報告は、今までは特に活躍の目立つ運動部を中心に報告してきましたが、今回は地道な活動を続け、また全生徒の四割が参加する文化部の活動を紹介します。文化部の中には、長い伝統を持ち、数多くの先輩諸氏の思い出多い部活動もあり、また現代の世相を反映した新しい部活動も姿を見せ始めています。今回はその全てを報告することはできませんが、他の機会を利用して、可能な限りの文化部を紹介したいと思います。

## 郷土研究部(十三名)

長い伝統を持つ郷土研究部は、その伝統の上に立ち、郷土に対する知識・見識を深め、郷土資料を残すことを目標として毎日の活動をしています。主な活動は、民俗調査を中心とした文化祭における研究発表であり、報告集が毎日の活動として行われています。

## 商業研究部(三十六名)

商業研究部とは、タイプライティングの技術修得を目標とする部活動である。英文・カナ文・和文三種類のタイプライターをいかに速く、美しく、間違いなく打つかの訓練が毎日の活動です。今後も年数回の競技大会・検定試験を目標に活動していきます。

## 吹奏楽部(五十五名)

吹奏楽とは、舞台の上の活動を通して、日頃の積み重ねた活動が評価される部活動である。部員の多くは、入学後始まった者であり、毎日早朝及び放課後の練習を続けている。その結果として、コンクール出場、定期演奏会、文化祭参加や各運動部の大会応援等の活動が行われている。

## 演劇部(十六名)

現在の中心的活動は、文化祭参加、定期公演、合同発表会コンクール参加などがあります。日頃は発声練習、本読み、柔軟体操等の訓練が主活動として行われ、一つの公演を成功させるためには、全員の団結という大きな力を必要とします。今後も地道な訓練を通して、力を養い、大きな成果を得ることを期待しています。

職員名簿 (昭和58年度)

職名	氏名	教科	H	R
校長	藤教頭	英語	2	4 (副)
副校長	井出定雄	英語	3	1 (副)
教員	...	...	...	...

生徒在籍数 (S.58.6.1現在)

学年	課程	在籍数	合計
一年	普	232 (46)	427 (91)
	商	195 (45)	
二年	普	164 (39)	339 (85)
	商	175 (46)	
三年	普	216 (48)	391 (84)
	商	175 (36)	
合計	普	612 (133)	1157 (260)
	商	545 (127)	

※ ( ) は女子の在籍数

<p>井出定雄 (工機六回卒)</p> <p>電話 (五回) 二七一九六七</p>	<p>齊藤邦男 (農商二期)</p> <p>電話 (五回) 二四一〇三三</p>	<p>丸木屋商店</p> <p>鈴木 市 (工機六回卒)</p> <p>電話 (五回) 二六二二五二</p>	<p>アカツキ商事</p> <p>佐野 堯 春 (農商五回卒)</p> <p>電話 (五回) 二七五二七三</p>	<p>ふなほし</p> <p>船橋 昌博 (農商七回卒)</p> <p>電話 (五回) 二六二九〇三</p>	<p>寿司相模屋</p> <p>加藤 栄一 (農商五回卒)</p> <p>電話 (五回) 二六三九九六</p>	<p>足袋庄商店</p> <p>石川 成章 (農商四回卒)</p> <p>電話 (五回) 二六一三三四</p>	<p>大内塗装</p> <p>代表取締役 大内 文人 (農商四回卒)</p> <p>電話 (五回) 二六一二八五</p>
---	--	--	---	--	---	---	--

世は革新時代

人物往来



ヤスヒデ 佐野 満治
常務取締役
(昭和二十五年卒)

高校生課程を無事終了し卒業式を明日迎えられ、本北嶺会入会に当たり、心から御祝い申し上げます。
世の中の急激な変化は、世の中に驚きを与えています。若人は実に羨ましい限りです。

時代の波に企業は乗り遅れまいとしている。新しい時代の到来であると言えよう。
世の中は大きく変わりつつあるようです。従って問題処理、計画、策定等においては実績中心主義の考えは通用しなくなった。昨日は有効であったが、今は明日、明日、明日に向かつて今日を何をなすべきかという環境変化にどう対応するか、これから時代を生きていく姿勢が求められる。

大学・短大合格状況

Table with columns for University Name, University Name, and University Name. It lists various universities and their admission counts for different faculties and departments.

産業別就職状況

Table with columns for Industry Name and Job Status. It provides a detailed breakdown of employment statistics across various industries like manufacturing, services, and government.

うなぎ、天ぷら和風料理
本店わかさ、若林勝也(県四回卒)

株 飯田建材
代表取締役社長 飯田 浩 司(県商一回卒)

岡重株式会社
代表取締役社長 岡村和郎(商二回卒)

かわむら呉服店
河村俊介(県商一回卒)

有限 茶房えりか
代表者 土橋英久(県商二回卒)

木内書店
木内正和(県商三回卒)

後藤文作商店
後藤英之(県商三回)

有限 食堂 菊屋
笠井治(商十回卒)

連載 北高のあゆみ (第四回)

思い出

元教諭 中山美次



遠藤 茂樹 小沢 靖 岩田 英善 相葉 繁 (校長) 名取 俊三 中山 美次

「十年一昔」という言葉がある。そうとすれば、私がこれから言うことは、とりもなおさず「昔の話」ということになる。一般に言われている「昔話」のように、教訓的なところもなければ、面白いところもない。昔を振り返って、思い出すままに綴った。年寄りの論言に過ぎない。

「十年一昔」という言葉があった時であった。工業学校は応用化学科だけで、各学年共一学級。商業学校は各学年共二学級という編成であった。両校とも五年制の中等学校であった。完成は二年先なので、生徒数は、工業が一五〇人、商業が三〇〇人という、まことに小じんまりした学校であった。

大石先生が亡くなられて早くも二ヶ月余になりま。今、しみじみと大石先生との出会いを思い浮かべています。私が中学三年、昭和四十八年の夏の終わりに、突然夜、私の家に訪ねて来られたのが、最初でした。それまで他の高校へ進学するつもりでいた私でしたが、大石先生の「北高へ来ないか」と言う一言は、私に思わぬと言わせるほどの強い印象を与えたのでした。

大石先生は北高を離れる事になったのです。そして、昭和五十七年の六月より、北高の監督となり、大石野球を継ぐ事になりました。大石先生は新米監督の私に手をとり、足をとり陰から指導してくださいました。入院してからも野球の事や私の事で心配ばかりかけました。何一つとして恩返しが出来ぬまま、大石先生はこの世を去って行ってしまいました。

十年という短い期間ではありましたが、私の生き方を方向づけるまでに影響の大きかった素晴らしい大石先生をいつまでも忘れる事はないでしょう。

向上発展に懸命の努力をされている。それを見聞きするのは、かつては関係を持っていた私にとって、この上もない大きな喜びである。(編者註、先生は現在富士宮市源道寺町一〇七(電話27一九三三八)にお住まいである。)

大石先生を偲んで

野球部監督 望月一敏 (昭和五十一年度卒)



戦況は奇烈なる一方であった。思い出さずにはいられないあの戦時中の事実。戦争は二度と経験したくない。

時は移り、世は進み、創立十五年にして昇立に移管され、その名も富士宮北高等学校となり、早や三十年になん／＼としている。終戦当時の建物は、もう一つ残っていない。残っていないのは、南グラウンドを含む広大な敷地と、大きく成長した樹木だけ。そこには新しくコンクリートの大きな建物が建ちならび、生徒の数も増大し、美しい大きな学園となった。

大石先生の卒業した立教大学へ行ってみたいと思うようになってきた。私が立教大学の甲子園大会出場でした。選手達が元気一杯に入場した。この時の大石先生の気持は、何年たっても忘れる事は出来ません。理論的にも人格的にも素晴らしい大石先生を開花させたのは、昭和五十五年の春の甲子園大会出場でした。選手達が元気一杯に入場した。この時の大石先生の気持は、何年たっても忘れる事は出来ません。

長い年月をかけて北高野球の名をあげた大石先生、

編集後記

母校の創設者望月軍四郎先生は郷土岳麓の発展のために有意な人材をという事でこの学校をつくられた事である。今迄経緯には出色の人が目立ったが、どちらかというと政界には余り目立った卒業生は少なかった。今回稲田圭佑氏がOBとして始めて県議に名をつらねた。又北高元校長吉田氏の市長当選。郷土のため両氏の御自愛と健闘を祈りたい。

北嶺文芸

鶴舟待つ黒きさざなみ 流れをり 鶴舟の火屑をくぐる 濡首ら 鶴舟や疲れ鶴の首はなれ浮く 浅羽緑子 梅雨入りやホロピツツ 氏の指の玄 濃紫陽花 夏薔薇のきょういを 説く尼僧 秋山たけし 夜が明けた、おこの 緑、生きてゐる 人も車も包みこんだる 茶園の昼 井出元一